第２２期第１３回北海道連合海区漁業調整委員会議事録

１　開催日時　　令和６年３月２５日（月）14 時 00 分

２　開催場所　　札幌市中央区北４条西６丁目
　　ポールスター札幌　２階　セレナード

３　出席委員　　会　長　　工藤　幸博
　　委　員　　岩田　廣美　　大澤　晃弘　　福原　正純
　　横内　武久　　須永　忠幸　　髙松　美津枝
　　三宅　博哉　　原口　聖二　　瀧波　憲二

４　欠席委員　　川崎　一好　　濱野　勝男　　阿部　国雄
　　今　　隆　　藤森　康澄

５　議事録署名委員　　須永　忠幸　　原口　聖二

６　議　　長　　会　長　　工藤　幸博

７　事 務 局　　事務局長　加藤　　勇
　　主任　　斉藤　　聡　　主事　　西田　策紀

８　臨 席 者

水産林務部		水産林務部長	山口　修司
	水産局	漁業管理課ｻｹﾏｽ・内水面担当課長	野田　勝彦
		同　　課長補佐（サケマス）	泉　　善友
		同　　サケマス係　係長	小野寺満寛
		同　　主査（増殖）	佐藤　岳志
		同　　主任	荒野　拓弥

（国研）水産研究・教育機構　水産資源研究所　さけます部門　資源増殖部
事業課長　平間　美信
事業課　主任技術員　羽賀　正人
（地独）北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場　さけます資源部
部長　藤原　真
同　さけます管理グループ　研究主幹　卜部　浩一
同　主査　大森　始

9　傍　聴　者

石狩後志海区漁業調整委員会	事務局長	林　恒之
〃	主事	佐藤　和
檜山海区漁業調整委員会	事務局長	日光　隆満
〃	主事	駒形　柊
胆振海区漁業調整委員会	事務局長	濱谷　仁
〃	専門主任	黒坂　裕樹
日高海区漁業調整委員会	事務局長	佐々木真琴
釧路十勝海区漁業調整委員会	事務局長	佐々木義信
〃	主任	山方　達也
根室海区漁業調整委員会	事務局長	松浦　謙二
〃	主事	窪田　悠汰
網走海区漁業調整委員会	事務局長	渡邊　修司
〃	技師	近藤　隆嗣
〃	主事	竹田　龍星
宗谷海区漁業調整委員会	事務局長	木村　佳人
留萌海区漁業調整委員会	事務局長	三上　征己
檜山振興局産業振興部水産課	技師	土門　佑介

10　議題

議案第１号　令和６年度さけ・ます人工ふ化放流計画について（答申）

11　報告事項

令和５年度秋さけ沿岸漁獲、河川親魚捕獲・採卵結果について

12　議事の顛末

事務局長

ただ今から、第２２期第１３回北海道連合海区漁業調整委員会を開催いたします。

開会にあたり、工藤会長よりご挨拶を申し上げます。

工藤会長

委員会の開催にあたりまして、一言、ご挨拶を申し上げます。委員の皆様には、時節柄、大変お忙しいところ、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。

また、公務ご多忙中のなか、国立研究開発法人　水産研究・教育機構　水産資源研究所及び、北海道水産林務部、道総研 さけます・内水面水産試験場の方々にも、ご臨席をたまわり、厚くお礼申し上げます。

昨年の北海道の漁業生産の状況を見ますと、主力であるホタテやサケが減少するなどし、生産量は速報値で昨年を若干下回る１０９万トン、前年比９５％、金額についても、昨年を下回り２千８百億円前年比８７％となっておりますが、イワシについては漁獲が好調に推移したことや、タラやホッケなど、漁獲量が減少したものの、魚価の単価が上がったことにより、漁獲金額が増加した魚種もあるなど、魚種別や地域別で差の見られる結果となったところであります。

さて、今年も３月下旬に入り、雪解けが進み、北海道でも春の兆しが、日々、感じられる季節となりました。また、オホーツク海では、海明けとなるケガニ漁が始まり、日本海では、ニシンが２月末には２，５００トンを超え、盛漁期を迎えているなど、今後、全道の各浜では、春漁が本格化してまいります。災害や海難事故がなく、豊漁で浜が活気に満ちあふれることを強く願っております。

本日の議案でありますが、毎年、道が策定しております「令和６年度さけ・ます人工ふ化放流計画について」の答申と、１件の報告事項が用意されております。委員の皆様には、円滑なご審議をお願い申し上げまして、開催の挨拶とさせて頂きます。本日は、よろしくお願いします。

事務局長

続きまして、本日、ご臨席いただいております来賓の方を代表いたしまして、北海道水産林務部山口水産林務部長からご挨拶をいただきます。

山口水産林務部長

ただいま、ご紹介をいただきました水産林務部長の山口でございます。第２２期第１３回北海道連合海区漁業調整委員会の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

工藤会長はじめ委員の皆様には、日頃から、本道水産業の振興及び漁業調整にご尽力をいただいておりますことに、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。また、道の水産行政の推進にあたり、ご理解とご協力をいただいておりますことに、あらためて感謝申し上げます。

さて、昨年の本道の水産業につきましては、ただいま会長よりお話がありましたとおり、なんとか１００万トンの大台を超えましたけれども、金額については、昨年から１３％減の２千８百億円程度ということで、これは、アルプス処理水の海洋放出によりまして、ホタテ貝が大きく単価を下げたということと、これから議題として上がります秋サケの来遊不振が大きな影響となっております。特に、昨年の秋サケにつきましては、高水温の影響もございまして、来遊は、２，２５６万尾に留まりました。さらに、地域間の格差も広がり、増殖事業の実施に当たっても大変厳しい状況になりました。秋サケ資源は、低迷が続いておりますけども、道としましては、餌に栄養を強化しまして、稚魚の活力を増大しまして適期に放流すると言う取り組みを進めておりますが、昨年は特に海水温が高くなっておりますので、これは前から指摘されているところでありますが、改めて海洋環境の変化に対応した取組が必要と考えております。

先般、道では３回目となりますが、秋サケ資源対策検討会議を設置し、効果的な対策を試験研究機関などのご協力頂き、引き続き、秋サケ資源の早期回復に取り組んでまいる考えです。

本日の委員会には「令和６年度さけ・ます人工ふ化放流計画」について、諮問しておりますので、ご審議のほど、よろしくお願い申し上げます。結びとなりますが、これから春漁が本格化してまいります。操業の安全と浜の大漁をお祈りし、さらには本日ご参加の皆様のご健康、ご健勝をご祈念申し上げ、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。よろしくお願い申しあげます。

事務局長

山口部長、ありがとうございました。

続きまして、本日、ご臨席をいただいております関係機関の皆様をご紹介させていただきます。

（臨席者紹介）

それでは、この後の議事進行は、工藤会長にお願いいたします。

工藤会長

それでは、初めに出席人員の報告をします。本日は、川崎、濱野両副会長と、藤森委員、阿部委員、今委員が所用のため欠席しており、結果、委員定数１５名中、１０名の出席を頂いておりますので、委員会は成立します。

次に、議事録署名委員についてですが、委員会規程第６条により、私から指名させていただきます。須永委員と原口委員にお願いいたします。

それでは、ただ今から議事に入ります。議案第１号「令和６年度さけ・ます人工ふ化放流計画について」を上程します。なお、説明に当たっては、報告事項の「令和５年度秋さけ沿岸漁獲、河川親魚捕獲・採卵結果について」もこの議案第１号の参考となる内容が含まれておりますので、報告事項につきましても、続けて説明していただきたいと思います。それでは、水産林務部から、議案第１号及び報告事項について、説明をお願いいたします。

佐藤主査

漁業管理課サケマス係の佐藤でございます。私から議案第１号、併せまして報告事項の１について説明させていただきます。座って説明させていただきます。

まず、議案第１号、令和６年度さけ・ます人工ふ化放流計画の道案について、説明させていただきます。資料１をご覧ください。諮問文の次に「令和６年度人工ふ化放流計画（道案）」を添付しております。この道案につきましては、３月１５日に開催された北海道さけます増殖事業協会の理事会において、了承された原案の内容となっております。また、道が策定するふ化放流計画は、道と民間団体が行う増殖事業に係るものでありますが、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所が行うふ化放流計画も含めて作成しており、水産資源研究所の計画は、２月８日に開催された、国の水産政策審議会、第１２９回資源管理分科会の答申を経て決定された内容となっております。

それでは、「令和６年度人工ふ化放流計画（道案）」表紙の次のページをお開き願います。このページは令和６年度における全道の放流計画を総括した一覧表です。上段の表が北海道の計画、中段が国の計画、下段が北海道と国の計画を合計したものであり、上段の北海道計画が今回諮問する内容となっております。本日は、表の右端の放流数総計で説明させていただきます。

まず、サケについてでありますが、民間の放流数総計が８億５，６２５万尾となっております。カラフトマスについては１億２，３７０万尾、サクラマスについては、２５０万９千尾、合計で、９億８，２４５万９千尾が北海道計画となっております。

中段の表、参考１が国の計画分であり、下段の表、参考２が北海道計画に国の計画分を合算した放流数となりますが、サケは９億８，５２５万尾、カラフトマスは１億２，５４０万尾、サクラマスは５２０万９千尾、放流数の合計は、１１億１，５８５万９千尾となっております。

次のページに参ります。１ページでありますが、北海道と国の計画を合算して、海区ごとに増減を示したものです。昨年からの変更箇所については、右の欄の放流数で説明させていただきます。１のサケについてですが、令和６年度計画に、昨年からの増減はありません。続きまして、２のカラフトマスにきましても、同様に昨年からの増減はありません。続きまして、３のサクラマスについては、令和５年度に採卵した幼魚と、令和６年度に採卵する稚魚を基に、放流事業を実施する計画となっております。幼魚放流数の欄、日本海海区では、令和５年度計画は前年度より１５万尾が減少した５６万５千尾となっておりましたが、令和５年級の稚魚収容数の増により、令和６年度計画は７１万５千尾と、１５万尾の増となります。

最後に４のベニサケについては、水産資源研究所の放流魚種の見直しにより、令和５年春の放流を持って終了となっております。次のページをお開き願います。２ページについては、国の分を含めた全道の魚種別、機関別の計画、次の３ページは海区別の計画、次の４ページはサケの地区別の、総括表となっております。５ページ以降は、只今ご説明しました内容の基礎資料となっておりますので、後ほどお目通し頂きたいと思います。

議案第１号につきましては、以上でございます。

引き続き、報告事項の「令和５年度秋さけ沿岸漁獲、河川親魚捕獲・採卵結果」について、ご説明させていただきます。初めに、全道の秋さけの沿岸漁獲状況ですが、資料２－１をご覧ください。資料については、令和６年１月３１日現在で取りまとめた結果となっております。一番下の総計で、ご説明いたします。全道の漁獲尾数は１，９２１万６，０２１尾、前年対比で６５．４％、漁獲金額では３８２億６，９７２万９千円、前年対比で５９．８％となっております。なお、各海区別の内容につきましては、後ほどお目通しいただきたいと思います。

続きまして、資料２－２の「令和５年度秋サケ河川親魚捕獲・採卵結果」について

ご説明いたします。親魚捕獲数ですが、一番下の欄の全道計でご説明いたします。全道の計画は１１８万５，９５０尾、それに対しまして、実績では、３３４万９，６７４尾、達成率は２８２％となっており、前年対比では８２％となっております。

次に採卵数ですが、種卵の移動を含めた収容卵数で整理しております。一番下の欄の全道計で、ご説明いたします。本年度の計画は全道で１１億３，２９９万粒、実績で、１１億３，５１８万１千粒で、達成率は１００％、前年対比で９５％となっております。

なお、各海区別の内容については、同様に後ほどお目通しいただきたいと思います。

以上でございます。

工藤会長

ありがとうございました。ただ今、一通りの説明が終わりましたので、この件について、委員の皆様からご意見ご質問を頂きたいと思います。なお、議事録の作成上、ご発言を頂ける委員の皆様は、事務局がマイクをお渡ししてからご発言をお願いします。それでは、何かご質問、ご意見等はございませんか。

岩田委員

計画は素晴らしい計画なんですけども、実績を見ると太平洋側は軒並みマイナス、ましては、道南地区なんて、ほとんど実績なしの状況です。計画を立てる時に、ある程度のものをやってもらわなければ、今後、一切の湾内の、これ最終的に魚が帰ってこない。いつでも言っているんですけど、やりますやりますたって、未だ、やってないのが現状で、今後、一切のことを考えての計画なのかどうか、この辺、きちっとした回答をもらわなければ、これ、太平洋側は今後、どうやって定置をやっていくのか。ましては、後獲り地帯のユーラップの鼻曲がり、これは、去年なんか、全然ないのと同じなんですよ。その辺、きちっとした回答お願いします。

工藤会長

それでは水産林務部の方からお願いします。

泉課長補佐

漁業管理課の泉と申します。岩田委員からご質問のありました件でありますが、まずは、放流計画でありますが、今月ですが、今、説明がありましたとおり、それぞれの増協さんからの事前の計画の話を道増協さんの理事会で承認した上で、こちらの方に計画

として出されていると、理解しているところでありますが、一方ですけど　先ほど、山口部長から少し話がありましたけども、沿岸水温、特に去年はですね、えりも以西とか日本海南部もこれまでにないような高水温だったという状況もございました。

そういうことを踏まえまして、本道全体の秋サケ資源の回復に向けて、底上げをしていかなければならいと考えていまして、今般の２月なんですけど、秋サケの資源対策の検討協議会を立ち上げておりまして、そこで、本日出席されております内水試さん、水試研さんからも、研究者の方の参加を頂きながら、特に、今後どういう資源作りができるのか、具体的な意見を頂いております。議論を何回か重ねた上で海洋環境の最新の知見ですとか、そういう情報共有しつつ、実際、ふ化事業をする各増協さんとも相談しながら、今後、どういうことができるのかということを８月を目途に、対策を検討していく考えでございます。以上です。

工藤会長

よろしいでしょうか。

岩田委員

いいわけないべや。毎年、同じようなことばっかり言っており、毎年、質問しても同じような回答しかない。ある程度、計画を立てたら実績にならなければ計画にならない。そして、何かあれば、温暖化、温暖化、温暖化したら計画立てても、実績を伴わないで。これは、回復にはずっと何年もかかる。このままいけば、太平洋沿岸、ましては、湾内の漁業地帯は定置やっていけないよ。ふ化放流しました。卵がなければ他から持ってきて、稚魚を放す。毎年同じだよ。なんか、進歩した考えでやらなければ、とってでもないが、太平洋の定置なんかやっていけないよ。肝心要なのは、いかに川に昇らせて、魚を増やすか。やっぱり、地元の卵でなければ、なかなか帰ってこないんだよ。移殖して帰ってくるんなら、昔からやっているよ。だから、道増協にも言うんだけども、卵を移殖して本当に帰ってくるのか。だけども、現状、ある程度の尾数を放なさなければだめだからという数合わせ。そんなことしているから、いつまでたっても帰ってこないだよ。定置協会でも言っているんだけど、定置協会、増協、道がきちっと三位一体で協議した結果を持ってきているのか。定置協会は定置協会、増協は増協、バラバラなのよ。魚がきて獲る、そして増やす、これは三位一体でなければうまくいかないよ。いつでも言っているんだよ。三位一体でやらなければだめだよ。

だけども、今回の切り替えにおいても、格差是正もできない。そのまま。格差是正しなければだめだよ。だから、ある程度獲ったら、下に魚を回す方法を考えてもらわなければならい。前期で網揚げ、魚が来ないときには、網を入れれば卵をやらないとか、くだらない理屈をつけて、そして網を入れさして。そして、魚がこない時は遅らせて網を入れさして、いざ、魚が来たときには、目一杯獲らせる。そしたら、下に下がる魚だって来るわけがない。もう少し考えてもらわなければ。やってますやってますて言ったって、何にもやっていないのと同じだよ。毎年、毎年。もう、3年だよ、帰ってこないの。ましては、道南のユーラップの鼻曲がり、どうするの。あれはもう俺が言っているように、トンネルの水が流れてから良くないんだよ。未だに手を付けていない。きちっとしてもらわなければ。１０年かかって復活するのか、４年目で復活するのか。それにかかっている。きちっとした意思表明をしてもらわなければ、納得しないよ。

工藤会長

その辺どうでしょうか。

野田課長

大変厳しいお言葉と受け止めます。従前、全道一律で放流サイズですとか、放流時期、道の方も試験研究機関も一緒になって指導はしてきております。昨今、耳石温度標識が普及してきておりまして、海域ごと河川ごとに増殖事業の仕方が異なるのではないかと認識が変わってきてまいりました。このためですね、今、試験研究機関の方からも指導を受けながら、温度耳石標識の調査研究の成果、これは内水試とか水試研でも取り組んでおりますけども、その実証の結果から、例えば、サイズをこのぐらい大きくしたら、通常放す海域よりも良いと。そのような部分などを既に取り込みながらやっている地区もございます。例えば、静内川もそうなんですけど、稚魚をある程度大きくして放したところ、管内的に海の方は漁獲は悪いですけど、河川の方はしっかりと親魚確保できており、えりも以西の中でも種卵の供給をできたというような実績もございます。ただ、やはり、川の方に昇っても海の方で漁獲できなければ、岩田委員のおっしゃるとおり、漁師の方の漁獲の収入が上がらないという事実もございます。ですから、これからしっかりと道としても取り組んでいきたいと思っているのですけど、やはり、今できる調査研究の中で新たに得た知見を少しでも早く、地区増協の増殖事業で取り組んでいないのであれば、加えてそれにしっかりと取り組んでいくと言うことが、喫緊の課題ではないかと思っております。

地区、地区において、いろいろな課題がある中で、すぐにできる地区増協、なかなか人員的体制、施設、あと、お金の問題も含めましてなかなかできない地区もございます。そういった部分も踏まえまして、先ほど、泉の方からも説明させて頂きましたけれど、秋サケ資源対策会議におきまして、最新、これは令和元年にも結果を出しているのですけど、それからまた新たに得られた知見もございますので、そういうものもしっかりと今の増殖の現場に入れて、一刻でも早く秋サケ資源を回復させる取り組みを進めるとともに、現在、道としても先ほど山口部長よりも話がありましたけれども、稚魚にＤＨＡを与えて遊泳力を強化する委託事業もやっておりますけれど、そういう道としての支援もできる範囲で、しっかりと活用していき、あと国に対し例えば調査研究の拡充も含めて併せてお願いしてきたいと思います。

特に、今、太平洋側、特にえりも以西につきましては、岩田委員がおっしゃるとおり、昨年は種卵の確保もできないような大変厳しい状況になっております。そういった中で道としてできることは、道増協もそうですけど、一緒に地区の方に入って、例えば、稚魚の中身を見直すのなら、そういうものも試験研究機関の助言も頂きながら、しっかりと課題を解決するため、取り組んでいくことが喫緊の課題と考えておりますので、今、放してすぐに効果が出るという話ではなく、最低でも３、４年はかかるようなことでございますけども、しっかりと取り組んでいきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いしたいと思います。以上です。

工藤会長

岩田委員よろしいでしょうか。

岩田委員

これ以上言っても。いいよ。

工藤会長

それではそのほか、ご意見ご質問はございませんか。なければ、よろしいでしょうか。

委　　員

（ありませんの声）

工藤会長

それでは、議案第１号については、諮問のありましたとおり定めることが、適当であるとして、知事に答申することに決定してもよろしいですか。

委　　員

（異議なしの声）

工藤会長

それでは、そのように決定します。

本日の議事についてはすべて終了いたしましたが、全体を通して、委員の皆様から何かご発言等はございませんか。

藤原部長

よろしいでしょうか。今、先ほどですね、岩田委員の方から厳しいご発言がありましたが、特に先ほど、泉補佐から話が出ていた秋サケ資源対策検討会議、この中でこの後、３回、８月まで議論することになっておりますけれど、これまで、ほかに２回ですね、平成２２年、令和元年と同じような検討会議をやっておりましたけれど、移殖の問題、この部分については、あまり焦点を合わせてこなかったのが現実かなと思っています。ただ、ここまで落ち込んでいる中で、実際問題、胆振あるいは渡島でも日本海の卵を入れていたということが実際にあって、この辺のところに我々研究機関としては、焦点を合わせメスを入れていく必要があるのではないかと思っており、そういう研究にも取り組んでいます。ただ、今すぐにこれ、結果が出るかと言うと、そういうレベルではないですけど、我々の認識としては、そこにメス入れていかなければならない。特に、温度標識という言葉がありましたけれど、移殖していくものに標識付けして放流し、実際に根付くのかどうなのか。根付かないのではあれば、変な話しお金が絡む話ですから。今、これだけ経営が厳しいと言っている中で、本当にそれをやることが良いのか悪いのか。一生懸命やることで、もしかしたら、悪い方向に向いているのであれば、それは、我々は真摯に受け止めて見直ししていく必要があると思いますし、少なくても、そこに科学的なデータを出してどう進めるのかということをやる必要があるのではないかと思います。先ほど言ったように、一年伸びれば、４年、５年先になってくる話になるので、急いでいるということは、我々もそういう気持ちであるのですけど。ただ、取り組みですね、そういうことを念頭において検討していると、この場でお伝えしたいと思います。以上です。

工藤会長

藤原部長ありがとうございました。そのほか何かございますか。よろしいですか。

委　　員

（ありませんの声）

工藤会長

特にないようでございますので、本日の委員会を閉じたいと思います。

工藤会長

委員の皆様方には、長時間にわたり、慎重なるご審議を賜り、ありがとうございました。また、水産研究・教育機構水産資源研究所、北海道水産林務部及び道総研さけま・内水面水産試験場の皆様にも公務ご多忙の中ご臨席をたまわり、ご説明やご指導を頂き、厚くお礼を申し上げます。また、本日出席頂きました山口部長におかれましては、この３月をもって御勇退されることと伺っており、長年に渡り水産業の振興にご尽力をいただいたことに対し、感謝を申しあげる次第でございます。

さて、冒頭の挨拶でも触れましたが、これから春漁が本格化してまいります。常にお願いしていることですが、海難事故、交通事故には十分注意をするよう、各浜へのご指導をお願いいたします。最後に、皆様方のご健勝と、益々のご活躍、そして本年の浜の大漁を心からご祈念申し上げまして、閉会の挨拶とさせて頂きます。本日は、どうもご苦労さまでした。

（14 時 40 分終了）

以上、委員会の顛末を記録した事実に相違ないことを認め、ここに署名する。

令和６年４月１日

北海道連合海区漁業調整委員会　　会　長　　工藤　幸博

議事録署名委員　　須永　忠幸

議事録署名委員　　原口　聖二